特別座談会
「ビジネスアイディア甲子園」の成果とは

高校生の視点で、商品やサービスなどを提案する「第15回全国高等学校ビジネスアイディア甲子園」（大阪商業大学、毎日新聞社主催）。今年は全国の164校から8483件の作品が寄せられ、12月17日に最終審査と表彰式が行われる。ビジネスアイディア甲子園は同大学の起業教育の一環で、そのほか全国の小中高の先生を対象にした「起業教育研究会」など、研究や情報交換などに幅広く取り組んでいる。今回は、同研究会の企画委員を務める近畿の高校の先生方に、ビジネスアイディア甲子園をテーマに各校での取り組みや成果などを語り合ってもらった。



柴田：ビジネスアイディア甲子園は起業教育の取り組みの一環であり、またキャリア選択への基礎的な人間力や、職業観を育成していく、という意味ではキャリア教育でもあると考えています。ビジネスアイディア甲子園の活用の仕方や、高校生への影響など教えてください。

貴島：ビジネスアイディア甲子園は、教科書で学んだことを試す重要な場になっています。高校生ならではの斬新なアイデアを、とよく言われますが、いきなり出るわけではありません。最初のアイデアを生かしつつも、ビジネスプランとするにはまず裏付け、根拠が必要で、情報を集めることに尽きます。コンテストとなればなおさらで、その辺を補足させていきます。いわゆるアクティブ・ラーニングになっています。

谷口：ビジネスアイディア甲子園を取り入れることで、日常生活の中での「４Ｆ」＝商品やサービスに対する不満・不足・不十分・不便といわれる気づきは、少しずつできてきているように感じています。さらに、外部の社会人の方に評価されることをとても生徒たちは喜びますし、自信につながっているように思います。最近は最終審査でのプレゼンテーションも評価対象になっていますし、事前指導や、事後指導などでいかにブラッシュアップしていくかが課題と考えています。

谷岡：審査する側として、内容的には過去15年間でさほど大きな変化はないように感じています。むしろ私たち大人の側がそういうアイデアを評価できているのか、最終審査に残らなかった中に、ものすごいタネがあるかもしれないと、いつも危惧しています。ただ言い訳のようになりますが、これからは一回失敗してつぶれるような人間ではダメ。何回でもチャレンジして、たとえアイデアを否定されたとしても、「俺がやってやる」と奮い立てるかどうか。またその時に皆がついてくるようなリーダーシップを発揮し、最終的に活躍してくれることを願っています。

柴田：ビジネスアイディア甲子園に参加する高校生たちへのメッセージをお願いします。

谷口：最終目標をイメージすることが大切だと思います。例えば本校周辺の地域課題をテーマにいろんなアイデアを出させて実現可能かどうかを検討させていますが、過疎化が進む地元の活性化なのか、生活を便利にするものなのか、どういう方向性でいきたいのか、目標設定がまず必要です。さらに自分たちの今までの知識や判断基準について、立場を変え、相手の立場なら「こういう見方も



京都府立京都すばる高校
貴島 良介 先生

京都府立京都すばる高校（京都市伏見区）＝商業系の企画科（1学年80人）・ビジネス探究科（同40人）・会計科（同120人）と、情報系の情報科学科（同80人）からなる専門高校。



大阪商業大学
谷岡 一郎 学長

専門は犯罪学、ギャンブル社会学。「科学研究とデータのからくり」（ＰＨＰ新書）、「こうすれば犯罪は防げる」（新潮選書）など。

あるんだ」と知るきっかけにしていってほしいと思います。

貴島：ビジネスアイディアを考えることは、世の中の課題に目を向け、他人事を自分事に変えていくきっかけになると思います。自分たちの問題として「自分事化」する力を身につけ、将来、彼らの人生で花開いてほしいと考えています。特に、今後は日本だけでなく、世界中どこにでも課題はあるという発想も大事でしょう。そして、何かを作り出すことに喜びを感じる人になってほしいです。

谷岡：今の子供たちは、考える力がないのではなく、考える癖がないのだと思います。習慣づけが重要です。やはりまず何か「やりたい」という思いが大事で、次にその夢をどうすればいいかです。そして、何を学ぶべきか考えた先に、この大学があればうれしいですが、もちろん違っても構いません。「やるかやらないか迷ったらやる」が本学のモットーで、高校時代はいろんなことに首を突っ込んでみてほしい。世の中を良くしようとチャレンジする意欲が根底にない限り、世の役に立つ人物とはいえません。日本から世界に広がってほしいですね。



奈良県立五條高校

谷口 達之輔 先生

奈良県立五條高校（奈良県五條市）＝商業科（1学年約40人）と普通科（同約240人）のほか、夜間定時制、農業科のある賀名生分校がある。



司会

大阪商業大学経済学部

柴田 孝 准教授

専門は国際経済学。特に水産資源に関する多国間交渉などが研究テーマで、開発経済学や貿易論も担当。起業教育委員会委員長を務める。

寄稿　昨年の学校賞受賞



大阪市立大阪ビジネスフロンティア高校

大中 真太郎 先生

大阪市立大阪ビジネスフロンティア高校（大阪市天王寺区）＝グローバルビジネス科（専門学科、1学年約280人）として2012年に開校。

ビジネスアイディア甲子園は1年生の共通課題として取り組んでおり、昨年は本校から準グランプリが選ばれ、学校賞もいただきました。生活における不便や不足などを把握することはもちろん、市場を知ることや高校生独特の視点と、幅広い年齢層の視点を考えることで視野を広げることにつながっています。日ごろから思いついたアイデアをメモするようになり、素朴な疑問に対しても好奇心旺盛に取り組むようになりました。また、ターゲットなどを細かくイメージし、利便性や収益性をアピールするように、1枚のプランシートに文章化していくだけでも、非常に難しい作業です。自らの考えを形にしていくことで主体性を身につけ、発信する能力に磨きをかけていくことができます。今後、ビジネスの担い手となるには、自由な発想の中から市場に合う商品やサービスへとブラッシュアップしていく力や、起業家精神がさらに必要でしょう。ビジネスアイディア甲子園の応募で、そのような多くのことを気づくきっかけになってほしいと願っています。

起業教育研究会について

教師らの情報交換の場

起業教育研究会は2002年にビジネスアイディア甲子園が始まったのを契機に、翌03年2月に発足した。先生同士が情報交換を通じ、起業教育の方法論や教育成果について理解を深めていくのが目的。毎年8月には、全国の小中高の先生を対象に公開講座を開催。企画・運営は大商大の教員と、近畿圏の高校教員で組織する企画委員会を中心に進められる。

今年度は「アクティブ・ラーニング」をテーマに実践報告などを展開。アクティブ・ラーニングとは討論や意見発表を通じて主体的に課題を探求する学習手法で、知識の定着が深まり、学習意欲を高める効果があるとされる。起業教育と結びつくことで、「アントレプレナーシップ（起業家精神）」の育成や、キャリア教育として生徒の成長を促すなど期待されている。

（2016年11月26日　毎日新聞朝刊）